

特別講演：核なき世界をつくる

参加者の感想

<高校生から>

1. 「知る」ことの大切さを学ぶ

田中熙巳さんのお話を伺い、私はこれまで感じたことのない強い衝撃を受けた。戦争を実際に体験された方から直接言葉を受け取るという経験は、私の中にあった「戦争」という概念を根本から揺さぶるものだった。

私は小学生の頃、「つるにのって」という本を読み、被爆した人たちがその場で命を落とすだけでなく、後から放射能の影響で病に倒れていく事実を知った。しかし、当時の私にとってそれはどこか遠くの世界の出来事であり、どこかで「物語」を読んでいるような感覚が拭えなかった。今回、田中さんの生々しい証言を聞き、あの本に書かれていたことは決して創作ではなく、この日本で、同じ人間が経験した地獄のような現実だったのだと改めて突き付けられた。

これまで学校の授業やテレビの特集などを通じて、原爆や戦争について学んできたつもりでいた。しかし、心の奥底ではそれらをどこか自分とは無関係の「作り話」のように捉えてしまっていたことに気づき、自分自身にショックを受けた。平和な日常に慣れてしまった私はかつての日本で起きた凄惨な出来事を直視できていなかったのだ。しかし、今もなお世界では戦争が繰り広げられ、罪のない人々が傷ついている。戦争は決して過去の遺物ではなく、現在進行形の残酷な現実である。

特に悲しく、憤りを感じるのは、今なお核兵器を保有し、それを「最終手段」として使おうとする考えを持つ国が存在することだ。

一瞬にして無数の命を奪い、生き残った人にも一生消えない苦しみを与える兵器を肯定することは、人間のすることではない。

平和な世界を実現することは、果てしなく難しい課題かもしれない。一人の学生である私に何ができるのか、正直なところまだ答えは出ない。しかし、まずは今回知った被爆の現実そして感じた衝撃や痛みを忘れず、核兵器のない世界を心から願い続けることから始めたい。

(鎌田祥穂さん：一関市在住、大船渡市綾里出身)

<東日本大震災被災地から>

2. 地球市民として考える

今回の講演で、田中先生ご自身の戦争体験、そして長崎への原子爆弾投下を実際に経験されたお話を直接伺えたことは、言葉では言い尽くせないほど貴重な経験でした。資料や映像では伝わりきらない現実の重みが、一つひとつの言葉から強く伝わり、胸が締めつけられる思いでした。同時に、二度と同じ過ちを繰り返してはいけないという思いが、これまで以上

に強く心に刻まれました。

この講演を通して、「非核三原則」の意味を改めて深く考えさせられました。核兵器は人間が扱ってよいものではなく、一度使われればすべてを奪い去ってしまう存在です。その恐ろしさを知っている日本だからこそ、核兵器廃絶を世界に訴え続けていかなければならないと強く感じました。

また、原子力発電についても強い疑問を抱きました。田中先生が仰る通り、原子力は人間が作り出したものであり、どれだけ技術が進歩しても「絶対に安全」とは言い切れません。東日本大震災での福島第一原子力発電所の事故は、その危うさをはっきりと示しました。それにもかかわらず、今なお原子力に依存し続けている現状に、違和感と不安を覚えます。日本のエネルギーのあり方は、このままで本当に良いのか、真剣に見直す必要があると感じました。

唯一の戦争被爆国である日本が、なぜ原子力発電を使い続けているのか。その矛盾に対して、私たちはもっと真剣に考え、声を上げていかなければならないのではないのでしょうか。

70年にわたり被爆の実相を伝え続けてきた日本被団協のあゆみの重みを受け止めるとともに、その思いを次の世代へとつないでいく責任を強く感じました。

そして、田中熙巳先生の言葉が深く胸に残りました。

「核兵器だけは使わせてはいけない。核兵器だけは、いち早く地球上からなくすということとを地球市民全員が力を合わせないと大変な危機になる。」

この言葉と70年のあゆみを決して忘れず、核なき世界の実現に向けて、自分にできることを真剣に考え、行動していきたいと強く思います。

(鎌田志穂子さん：一関市在住、大船渡市綾里出身)

3. まさに得心

一期一会の機会を得られました事 心から感謝申し上げます。

アイルームで拝聴いたしました。同じ空気をともにしての田中先生のお言葉一言一言が心に染み渡りました

13歳時の被爆体験

原爆→光→放射線→爆風→着火→黒煙

「〇〇万人を殺戮する核兵器は 兵器では無い 道具だ」

「もの言う国民になろう」等など

あっという間の終演まぎわに釜石からまいりました一市民です。

私達は15年前の福島の原子力発電所の災害を体験したにも関わらず、昨今、原子力発電所の再稼働のニュースに驚いております。田中先生のお考えを教えてくださいのですが・・・と質問させていただきました。

先生のお答えは 工学専門家としての言葉だとして、「人間は失敗をするものだから・・・」

「反対しましょう・・・」とってくださいました。

まさに得心

福島の人々の人生を奪いながら原子力発電所の最終処分も出来ない現実での再稼働ニュースにおびえるだけの非力さゆえに原子力発電に代わる新エネルギーの発明を心底待ちのぞむばかり

帰路車中の私でした

(北村弘子さん：釜石市在住)

<市民から>

4. 被爆とその後について考える

日本被団協の田中照巳先生の講演を拝聴できたことは、私にとって大変貴重な経験となりました。日本被団協は、原爆被害者の方々が主体となって組織した団体ですが、書籍を読み、初めて同団体が被爆者に対する「原爆医療法」の制定や国連における核兵器禁止条約の採択、批准のための署名活動などを行っていることを知ることができました。核廃絶に向けて、様々な活動を、日本のみならず、世界的な規模で活動していることをもっと多くの人に知ってもらいたいと思いました。

私は、学生の頃、原爆の恐ろしさ、悲惨さを授業で学びましたが、こうして被爆者の一人である田中先生から直に体験談をお聞きするのは、恥ずかしながら初めてでした。また大学生の頃、第五福竜丸に関する書籍を読む機会があり、核の被害が戦時下だけではなく、人々の日常の生活でも恐ろしい影響をもたらすことを知りました。大学の講義で戦争を知るには、当時戦争を体験した人々から話を聞くのが、本当の戦争を知ることになることだと聞いたことがあります。田中先生は戦時下で自身が被爆の被害にあうだけでなく、伯母さまたち親戚の 5 人の方々が短期間で失うことは、筆舌しがたい苦しみだったのだろうと感じました。

広島、長崎は人類史上初めて原子爆弾が投下され多くの死傷者を出しましたが、恐ろしいのはその破壊力だけではなく、放射線による人体に対するその後の影響であると思います。戦時中アメリカは多くの核実験を行いました、その実験を行うために、多くの若いアメリカ兵が従事し、彼らには放射線による被害を知らされない状態でした。戦後、日本は、GHQ の支配下に置かれ、その後しばらくの期間、アメリカと日本政府が原爆に関する報道を隠蔽したことは、被爆者や医療に従事する関係者に対して、国家が行うべき救済の義務を放棄しているように感じられます。このようなことから、政策を優先とする国家の姿が見えてくる気がします。また東日本大震災では、福島原子力発電所の事故により、放射性物質の飛散が大きな問題となりました。質疑応答では、田中先生は現在の技術では、原子力発電所の運営はまだまだ難しいと仰っていましたが、原子力との人類との共存は、まだまだ難しいのかもしれません。

世界各地では、紛争や国家間の戦争が絶えず、テレビやインターネットのニュースでは戦争や紛争の記事が目につきます。後世に核廃絶、戦争の悲劇を伝えていくことは、私たちの

役割だと思いました。

(國原恵美子さん：名古屋在住)

5. 感覚的に

田中様がご自身の体験を感覚的に理解してほしいといわれたことが心に残っています。イランやガザ地区の爆撃をニュースで聞き、映像でも見ているはずですが、感覚的にということが非常に難しいことなのだと思います。その感覚が共有できれば、誰しも核のボタンを押したり、また銃の引き金を引いたりすることにはならないでしょうし、また経済を追及するあまり安全を怠ることもないだろうと思うのです。ですが、自分がその立場に立っていない時どのようにそれを伝えまた感じさせることができるのか、深い問題だと思います。私たちは少なくとも核兵器禁止条約に入ってそのことを大きな声で伝える立場の国民だと思います。自分もその下の世代の人たちにも核兵器の被害の痛みを想像力を持って伝えていきたいと感じました。

(有賀理恵さん：東京都在住)

6. 分岐点に立って

中東情勢が極めて緊張している現在、日本が戦争災害に巻き込まれる危機をどのように防ぐか、重要な分岐点にさしかかったように思います。かつての通常兵器とはちがって、極めて残酷な特殊兵器が使われていると聞きます。もちろん核兵器の使用につながる危険性も排除できないと思います。人の命を犠牲にしても自国の経済的繁栄を追い求める大国の論理に対して、多くの政治家たちのように何の忖度をすることもなく、被災者の立場から毅然と批判的でいらっしゃる田中熙巳氏のご主張に心から共鳴しました。

(成井和子さん：東京都在住)

<アンケートから抜粋>

7. 重みのある言葉

「核兵器は武器ではない。悪魔の道具だ。生き残っても同じ人類ではない」

→原爆の惨状を目の当たりにされた方の大変重みのある言葉だった。

「伝承には戦争をリアルに理解すること、話し合うこと」

→「話し合うこと」と聴いてハッとさせられた。互いに力を併せて考えること、共有して行動に移すことが課題解決の基本であると思った。

(Aさん：岩手県在住)

8. 生々しいご講演に強く引き込まれ、前のめりで拝聴しました。原爆投下時の体験を通じて、核兵器の被害が単なる爆発による破壊にとどまらず、放射線によって後から命を奪うという点に強い衝撃を受けました。助かったと思われた人が後に亡くなるという現実や、安全のために退避をした人々の命まで無残に奪った歴史は、核兵器の本質的な非人道性を象徴

していると感じました。

(Bさん：東京都在住)

9. 長崎でのご自身の被爆体験を丁寧にご紹介いただき、印象深く拝聴しました。相互確証破壊 (MAD)、核抑止論、核兵器不拡散条約、核兵器禁止条約の現状から、いかにして「信頼」→「話し合い」→「核廃絶」に到ることができるのか、改めて「人間」と「社会」「集団」について再考の機会をいただいた。

…NPTは、地球上での核兵器の絶対不使用を前提とした、条約批准国の承認・同意の下での、核保有国による「構造的暴力」の体制維持と言え、現在のアメリカ、イスラエルによるイラン攻撃もその体制維持を前提にしている。イスラエル等の核保有は、現在の国際法による安全保障体制の限界を示している。

(Cさん：岩手県在住)

*回答者から後日、『『構造的暴力』に関する記述は、ヨハン・ガルトウングの定義からすると、少々逸脱しているようにも思われます。』と今後さらなる吟味が必要とのコメントをいただきました。

10. 核爆弾は世界を滅亡させる

私たち一人ひとりに深い問題提起を投げかけるものでした。それは、「核なき平和な世界をどのように築いていくのか」という問いです。この課題に向き合うためには、戦後80年、さらには昭和に入ってから100年という歴史を振り返り、学びを継続していくことが何よりも大切だと感じました。そこで得た思いや願いを共有し、それぞれが自分なりの小さな一歩を踏み出すことが、今まさに求められているのだと思います。研究や活動を継続しながら、自他の命をどのように守り、平和な世界をどのように創っていくのかを考え続けることは、政治家でなくとも、私たち一人ひとりにできる大切な役割です。学びによって得た教訓や気づきを社会に向けて発信していくことは、必ず可能であると考えます。これからも、ぜひ一緒に学びを進めていきたいと思っています。これらは、災害文化研究会の重要な役割の一つであると考えます。

(Dさん：岩手県在住)

11. 講演に盛岡までおいでくださった田中照巳先生が93歳でいらっしゃるということ驚きでした！お話しがよどみなく、81年前のことが今も目や心に焼き付いておられるのだと思いました。惨状を目にされたにも関わらず、私たちに冷静にお話しいただきましたこと、心より感謝申し上げます。核兵器廃絶を実現することを「使命」とされている方の背筋の通った生き方の一端にふれるという機会を得る幸運に恵まれたこと、これからの人生に必ず生きるものだし、活かしていかなければと思いました。

一方、田中先生がお話にならなかったこともあると思います。自分で想像したり、勉強したりしなければならなかったと思います。田中先生は、被爆された方の酷い姿に驚愕した

けれど、それも5～6人であとは感じなくなりました、とおっしゃっていました。人が耐えられる限界を超えた惨状だったのだと思います。戦艦を建造していた造船所のある長崎が、不思議なことにあまり爆撃を受けていなかったとのこと。その理由を、原爆の効果を見るためではなかったかとも。

現在世界で進行中の戦闘行為を見ると、戦争とは人の住む地域で、開発した武器を実験する行為のようです。一般市民はモルモットであり、強者は一人の命をあまりにも軽く考えるということは、81年前と変わらないどころかより一層その傾向が強まっているかもしれません。経済や政治の仕組みがグローバル化・複雑化していると言われる時代だからこそ、田中先生の行動や考え方の指針の「シンプルに」を心に刻みたいと思います。シンプルに「戦争はしない」ということ、「命を守る」ということを求めて行動しようと心に刻む講演でした。ありがとうございました！

(Eさん、東京都在住)